百々裏話(79)

おもて　あきら

◎春日竜神の間狂言

能の前段と後段をつなぐ間狂言(略称「間」)には、語り間・末社間・早打間など種々の形があり、同じ末社間にも末が三段之舞になる形とフレ(その分心得候へ〳〵)で終る形があったりして、形態が多種多様である。高砂ならばワキが呼び出しての語り間、張良ならば早打間というように、曲によって中入間の形が一定しているのが常であるが、例外も少なくはなく、特に春日竜神は種々の形態の間が存在することでは代表的な曲である。

狂言方三流の間狂言本について調査した所では、春日竜神の間には、現存しないものをも含めると、次のような諸形態がある。

①南都の住人が出て語り間になる形。

②春日の社人が囃子無しに登場し、語り間になる形。

③春日の社人が囃子無しに登場し、ワキと応対した後にフレで終る形。

④猿が末社来序の囃子で登場し、シャベリの後に三段之舞になる形。

⑤右と同形に近いが、末がフレになる形。

⑥末社の神が末社来序の囃子で登場し、シャベリの後にフレで終る形。

⑦右と同形ながら、シャベリの中に町積りが挿入されるもの。

このように種類が多いのは、春日竜神は上掛りでは待謡があり(来序の囃子なし)、下掛りには待謡が無い(来序の囃子あり)ことが第一の原因である。この相違は、室町末期から生じた事らしく、下掛りの方が原形らしいが、待謡の有無は来序の囃子の有無とつながり、来序が無くては末社形式の間は出られないことになるのであって、同曲で間の形態に混乱があるのは、多くは待謡の有無が一定しないことに由来している。また、通常は五番目物とされる春日竜神が時には脇能としても演じられた事や、狭間として町積りが存在し、狂言方がこの曲の間を習い物として重視してきた事も春日竜神の間の形態が多様であることの原因となっている。

まず①の形は鷺流独自のもので、ワキが高安流の時の観世の脇能に専用だったらしい。待謡があれば語り間になるのが常であるが、高安流以外の脇方がセリフを交わす事を承引しなかったため、用途が限定されたのであろう。鷺流でも後に採用した形らしい。脇能の語り間はワキに呼び出されて出るのが原則であるが、これは自分から出る形である。脇能以外の時に用いた事も考えられよう。

②は『狂言集成』に見える和泉流の形で、「観世流乱序(＝来序)無之故にかくの如く社人の間にする也」と注されている。宝生を含めていないのは、同流はワキが下掛りだけに、来序を打つように改めて演じたことが多かったためであろうか。①と③の中間の形。社人が出て語り間になるのは稀有の例で宝生流右近にかつて同形が存したことを知るのみ。

③は鷺流が伝えた形で、脇能以外の上掛り春日竜神に用いたのであろう。中入間の社人は通常は末社と同格で、末社来序の囃子で出、シャベリの後にフレで退くが、これはフレで終る点のみが同じく、囃子無しで出たり、ワキと応対したりする点は異例に属する。②と同様、上掛りの形に合わせるために作られた無理な形のようである。

なお、大蔵流は①②③の形を伝えず、従って上掛り(特に観世)の春日竜神に大蔵流は間をつき合わないのが江戸期の定めであった。近年は種々の妥協策が講じられ、観世の間を大蔵流が勤める事も行われている。

④⑤は大蔵流独自の形で、猿が「ましなれども末社一ぶん」と称して登場する。下掛り

の春日竜神に専用で、三段之舞を舞う④が脇能の時、フレで終る⑤が然らざる時の形である。脇能のために④が考案され、後にそれを脇能ならざる時にも転用して⑤を作ったらしい。ともに「春日竜神猿」と呼ばれていた替間である。山本東次郎氏の『間狂言の研究』には、文句は常と変らぬ由や、近年残されていない由が見えるが、写本によれば文句は常の末社間(⑥)とかなり違う。また茂山弥五郎氏が演じた由をも仄聞している。

⑥は狂言方三流が伝える間で、下掛りの春日竜神に適応する形であるが、観世・宝生も待謡を略してこの間を採用したことがあるらしい。これが春日竜神の間の基本形、他はこれから派生したものと考えてよいであろう。

⑦も狂言方三流が伝え、重い習い物とされてきた替間である。⑥の末社間のシャベリの中に、唐の長安から天竺王舎城までの里数・行程の計算を、六町一里の小里と三十六町一里の大里との換算などもまじえて挿入するもので、町(距離・日数)を積る(計算する)ことから「町積り(ちょうづも)」と呼ばれている。三流の文句の比較からは、大蔵流の形を範として和泉・鷺が後に採用したものと認められる。この町積りについては、後に再言しよう。

以上の諸形態の他に、鷺流で長上下を着た者(語り間の姿)が出て立間(シャベリからフレになる形であろう)で勤めたことがある由『豊高日記』に見える。享保頃の宝生の能で、大夫は語り間を要求し、脇方や狂言方が断って、殊の外に揉めた後の便法であったという。上掛りの春日竜神に下掛りの三役がつき合う場合にそうした揉め事が生ずるのであり、現在観世の春日竜神に大蔵が間をつきあう時も右の形らしい。春日竜神の間が多種多様なこと、以上に見た如くである。

ついでなので、町積りの間の全文を掲出しておこう。紀州藩狂言方大蔵流松井家に伝えられた『松井家習事』(法大能楽研究所蔵)に二通り掲載されているうちの「真」と注された分で、享保頃の写しである。「 」の部分が町積り独自の文句で、そこを除けばほぼ⑥に該当する。(一部仮名を漢字に改め、他本で訂正した)

春日竜神　町積り

是は和州春日大明神に仕申末社の神にて候。唯今是へ出る事余の義にあらず、栂尾の明恵上人入唐渡天有べきと思召、御暇乞に当社へ御参り候間、秀行を以てとどめ御申候、其故は、明恵上人と笠置の解脱上人此両人を、大明神の両の御眼左右の御手のことくに思召(に)仍て、片時の間もはなれ御申有へき事をいかがと有る。去ながら両人の内にても、笠置の解脱上人は少しまん心御座有により、二郎と頼み、物越に御言葉をもかわし給ふが、明恵上人は御心正直にして、慈悲心にましますに仍て太郎と頼み、直に御言葉をもかわし給ひ、既に当社初社参の折節も、奈良坂迄御迎に出給へば、誠に心なき草木迄も枝をたれ、畜類鳥るいに至迄出向ひ、膝を折羽をたれて拝し申ほどの貴き御方也。明恵御座なくては大明神もいかがと思召、秀行を以て色々とどめ給へども、「明恵聖人は御心つよく、只一筋に渡天の事を思ひ立べしとて、路次の積りをかんがへ御覧ずれば、大唐長安の京より天竺摩訶陀国王舎城の間、五万里と云々す。余の事はさしのけて先此沙汰きやうせんなり(ィ「経説也」)。しばらく是を御覧ずるに、是は小里の町なり。大里卅六町につもれば八千三百卅四里と廿四丁也。小里の百里を二日にして、大里ならば一日に八里余りに当るべし。小の千里廿日、小の万里二百日、五万里一千日の町なり。一年の日数必三百六十日なれば、正月ひとひに大唐長安の京を出て、第三年十月十日には印度の仏生国に至り着べき。されども嶮難さがしき道なれば、左様にはゆかれまじい。一日に七里余りあゆまば、第四年二月廿

日に王舎城に至り着べし。一千一百六十日の丁也。若一日に五里余りゆかば、第五年六月十日には印度の仏生国に至るべし。かぞふれば一千六百卅日の町也。是は夥敷陸地成りとて、又海路を尋て御覧ずれば、十万里の波濤と常には見へたり。夫も風波の難猶もおそろしきが、陸路も山岳けんきよくにして、あつき毒虫さりがたき。されども古しへの玄弉三蔵法師も、龍砂川にて七度迄神蛇に生をうばわるるとは申せども、度々にうまれ替って終に行程に、五万里の陸地もかたやすなるが、王舎城に至り、大般若の妙軸をわたし、末世の宝となし給ふ。其玄弉三蔵渡天着て詩に曰、十万里程多少難、（沙中（原本・汝））弾ㇾ舌授ㇾ三降竜ㇾ、五天到日応ㇾ頭白ㇾ、月落長安半夜鐘と作られたり。惣而大唐と天竺の間に、りうさ・さうれい・鉄門・しやくすいとて、四つの難所有。か様の悪所を明恵上人御通有べき事を、大明神もいたわしきと思召也。」然ども上人は、片意地に渡天有て、末世迄も古しへの玄弉三蔵法師のごとくあらまほしく思召とも（ィ「思し召し」）、印度の仏生国の恋慕の思ひ忍びがたき心をゆるさんがために、内には三密加持の方便を以てうんゆしゆきやうの願望を祈り、外には遠近山川の行路をかんぢうし、ちぢに心をつくし給ひ、仏跡を拝まんとの念願也。大明神其心ざしを憐み給ひ、渡天有べきとの御事も仏跡を拝まんためぞかし仏在世の時分ならばこそ渡天ありても御見聞も有べけれ、今の渡天いかがとの御事なり。我等の存るは、渡天なしといふとも、当社の御本地は霊鷲山の釈迦如来にておはします。（ママ）此お山こそ霊鷲山なれ。山はどうざる形を現じ、釈迦薬地歓文と顕れ、古今に至る神道を顕はし、里は平安のちまたを見せて、人間長久の声みてり。扨神道よりあがめ奉るは、当社一の宮はたけいかづちの尊、二の宮は下総かんどりより移り給ひ、いはゐ主の尊、三の宮こそあまつこやねの尊にて、下界の神道の棟梁の御神にてまします。神護景雲二年十一月九日のちのへ申の日、此お山へうつり御申有。かるがゆへに、りやうぜんじやうぼうをうつし、本地も神道も有がたき御事也。第四の宮はあいとの御姫あまてらすおの御神也。か様の有難き御神のとめ給ふも、偏に上人の御手柄にて候、上人渡天の事御とまり有におゐては、今夜の内に三笠の山へ五天竺をうつし、まやの誕生がやの成道、じゆぶうの説法双林の入滅迄、ことぐ〳〵く仏在世の様体をおがませ申さうずるとて、秀行かたくとどめ給ふ間、此上は明恵上人も御とどまり有べきと思召るるほどに、今夜の奇特が勘要にて候。やうやう五天竺もうつり候やらん、山河も大地も震動仕候。五天竺といつば、東西南北の四つに中天竺をそへて五天竺といへり。うたがひなくみな〳〵心をしづめて御拝み候へ。先某は罷帰り候ぞ。其分相心得候へ〳〵。

右が春日竜神町積りとしてはほぼ平均的な内容である。これに、四つの難所の解説や春日神社の鹿や樹木の事を加えたりする形もあり（能研蔵、貞享二年松井兵右衛門本）、漢詩のことや春日四所の由来などを除いて短くした形（教育大図書館蔵江戸初期写本や、『松井家習事』の「行」と注された分）もあって、同じ大蔵流でも本によってかなり違っている。『狂言集成』所収の和泉流町積りは大蔵の短い形に近く、鷺流の分（能研蔵『鷺流能間』による）は、町積りの前に本地垂迹説を長々と述べたり、後に三蔵法師の苦難を詳しく語ったりして、読むのにくたびれるほど長大である。町積りの間が『豊高日記』の頃（江戸中期）にも退転同様であり、近年も久しく上演されていないのは、長過ぎることが最大の理由であろう。町積りの部分を生かし、前後を簡略にすれば蘇生できるのではなかろうか。

（編集部註・本日上演の「町積」は山本家に伝えられるもので、ここに掲載した文句とは相違する）